

## 23 『ドン・キホーテ』にみる保護の三つの型について

小曾戸明子

日の出ヶ丘病院

国家の盛衰に身を呈してゆだね仕え支え傷ついた作者自身の実人生を背景に描かれた作品は多いが、そのスケールと普遍性においてセルバンテス（1547-1616）の『ドン・キホーテ』（前編1605、後編1615）の物語から学ぶことは多い。精神療法の教科書や教養の書として評価され用いられてきたようだが、その汲めどもつきぬ泉のような珍事や対話から楽しい冒険の絵物語ともなり子供たちに親しまれてきた。しかしその奇想天外、滑稽な狂態の背後に、著者の悲しみの本質は祖国スペインへの愛を越え、盛者必衰の理を越えて四百年の時を経て力強いモノを伝え示してくれている。

今回は精神科臨床の立場で、病む人の「保護」のあり様に注目して著者セルバンテスが伝えようとした一断片を考えてみたい。

症例としての物語主人公ドン・キホーテは、本名アロンソ・キハーン、古い家柄の郷士で50歳近いが独身で姪と家政婦と三人暮らし。マドリードの南の村に住み、騎士物語を読みふけり、狩りや野良仕事のさしずを忘れ、眠りも忘れ、分別を失い、自ら騎士妄想にとりつかれて遍歴の旅に出る。三回試み、いずれもみじめな形で「保護」されつ戻される。

第一回目の旅は、先祖伝来の甲冑をとりだし磨き、飼っていた瘦馬にロシナンテという名馬の名前をつけ、単身の門出には勇ましくも三日目に体中傷だらけで街道にのびているところを通りかかった同じ村の農夫ペドロ・アロンソに助けられ村に戻ってくる。この隣人は、本名で呼びかけ怪我の有無を確かめ自分のろばの背に乗せ気がふれていることを見抜くと人目にさらすまいと暗くなって村に入り送り届ける。

二回目の旅は、農夫サンチョ・パンサを従者とする二人旅。道中の珍事を切り抜けつつ、囚人を解放した罪に問われて山奥に逃げ、断食と断眠の苦業をはじめ。村に連れ戻し正気に戻したいと思った和尚と床屋は二人の後を追ひ、考え、妄想を逆手にとり扮した演技で迫り、捕方たちを説得し、丸太を格子に組んだ檻のようなものに眠っているドン・キホーテを縛りあげて入れ身動きできないようにし、変装した人々にかつがせ牛車に乗せ、村には日曜の昼、村人が群れている広場を通り抜けて帰る。

三回目の旅には、同じ村の出身で大学で神学を学び村に帰ってきたばかりの青年サンソン・カルラスコがかかわる。和尚や床屋のこれまでのやり方とちがい、ドン・キホーテを村にひきとめるのではなく、遍歴の旅に出させて自分も遍歴の騎士となって試合を申し入れる方法を提案。騎士道の掟に従い、敗者は勝者の命令に従うという約束を前もってしておけば若い自分が勝つだろうと。予想に反してこのカルラスコの「鏡の騎士」はドン・キホーテの一撃に敗北。さらに次の機会を得たカルラスコ「銀月の騎士」は見事に勝利。敗れたドン・キホーテは「武器を捨て冒険を求め歩くことを止め、故郷の村に隠棲すること」を誓約させられる。村に戻ったら一介の牧人として山野をかけめぐる牧人生活の夢を従者サンチョに語るが、帰郷してまもなく床につき、和尚、床屋、カルラスコが死の床に呼ばれ、告解の遺言にたちあう。

これら三回の遍歴の旅からのつれ戻され方には、象徴的な形で三つの保護の原型が示されていると思われる。拘束（抑制）と対決というあとの二つは現代にも通じるものがある。しかし私が注目したいのは、隣人の力、そして伴侶ともいえる従者の役割の二つである。偶然の災難の「その時その人」を自分と同様に大切にできる心情を当然のこととして持てる農夫の隣人としての力。妄想の下での甘い約束を信じ込んで従った文盲者の自然かつ複雑な変貌のあり様。著者自身が後世の読者にゆだねたものは何か？ あらためて作品に依拠しつつ読んでいきたい。